

屋といふもの作べき力もあらねば、唯庵の内をかた計をかしくまつらひ、爐を構へり、斯狭き家也ければ、御供のもの共はみな垣の外に留りて、内へは御近臣二人のみ参りぬ、彼叟足を痛みけるが、貴人の御前にて争か無禮には坐可申と、いたく侘候を御聞付、不苦候間おり能様に坐し可申と被仰候へば、御免を蒙り、二三歳なる稚子の坐したる如にして、御茶を奉りける、茶入のこと様なるを御覽被成、名を御尋候へば、名は無御座候、由答申候、其茶入のかたのめぐりに、雲のやう成物有ければ、横雲と呼候へと被仰候、御茶過て御歸りなされ、あしや釜を彼翁に被下候、此段は御隠居

〔槐記〕享保十二年十月十五日、参候、中井主水定覺が常修院殿○慈胤親王へノ咄シニ、昔シ加藤越中守ハ、武威ノ天下ニカクレナキ者ナリシガ、茶ノ湯ノ沙汰ハサマデ聞ザリシガ、或時ノ所望ニテ、金森宗和へ参ラレシガ、甚ダ唱嘆ニテ、宗和ノ茶ハ名人ト謂ツベシ、我所望セシハ、全ク茶ノ儀ニアラズ、其氣ノビハツル所ヲ見ント欲シテ也、ニヨツト炭取ヲ持テ出ラレシヨリ、一禮ヲ述ケルマデニ、スキマアラバ、鍵ヲ入ベシトテ、ライシガ、氣ノ満タル處、一毛ノスキマモナクテ、終ニ鍵ヲ得入レズト語ラレシガ、誠ニ御上手也ト承リ及ビ、ヌト申タリケレバ、常修院殿サコソアルベケレトテ、大ニ嬉ガリ也。

〔明和〕京羽二重三茶湯者

上京本法寺前町 千宗左 同 千宗室 武者小路西洞院西 入町 千宗守 西洞院
七條上 二丁目 藪内常知 上長者町新町東 江 入町 大森有斐

〔茶傳集 茶人系譜〕石州流

伊佐幸琢 松平出羽守初佐渡守、後出羽守、從四位少將治郷、號不昧、宗納、稱

〔筆のすさび〕茶事に長じたる人、古より名家數多あり、おのれ橋通壯年のころより往來して、目